

日本の詩歌

17

堀口大文学
西条八十
村山槐多
尾崎喜八

中央公論社

堀口 大 学
西 条 八 十
村 山 槐 多
尾 崎 喜 八

昭和43年12月5日初版印刷

昭和43年12月15日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

堀口大学

月光とピエロ

水の面に書いて

新しき小径

砂の枕

人間の歌

あまい囁き

雪国にて

白い花束

夕の虹

98

西条八十

砂金

105

見知らぬ愛人

124

蠟人形

144

美しき喪失

147

一握の玻璃

173

青い椅子

195

村山槐多

槐多の歌へる

尾崎喜八

空と樹木

高層雲の下

曠野の火

旅と滞在

行人の歌

高原詩抄

此の糧

同胞と共にあり

366

361

356

347

337

331

311

293

199

花咲ける孤独

369

歳月の歌

376

田舎のモーツァルト

380

詩人の肖像

河盛好蔵

鑑賞

村野四郎

山室 静

年 譜

カット

長谷川 潔

東郷青児

芝田禎五

小林ドンゲ

野口 証夫

村山 槐多

高田 博厚

芹沢 銈介

串田 孫一

堀口大学

月光とピエロ

雪

雪はふる！ 雪はふる！
見よかし、天の祭なり！

空なる神の殿堂に
冬の祭ぞ 酣なる！

たえまなく雪はふる、
をどれかし、鵜等よ！



『月光とピエロ』は、大正八年に出版された堀口大学の第一詩集である。二章七十九篇を収録し、装幀、挿画は長谷川潔、永井荷風の序文を添えている。当時、大学は二十八歳。外交官である父に従い、ブラジルに在った。

大学はその青春時代の多くを海外諸国で過したが、このブラジル在住が、いちばん長く、二十七歳から三十三歳にわたっている。

このころ、すでに国内でも新進詩人としての文名もあがり、『明星』を初め、『三田文学』、北原白秋の『木蘭』、川路柳虹の『炬火』などに作品を寄せていた。

滞在中は、リオ・デ・ジャネイロの日本貿易商社の非常勤客員となり、給与を書籍の購入費や故国での出版費に当てていたようである。大学は、この年に第一歌集『パンの笛』をも出版している。

大学が、グールモンを初め、フ

うたへかし、鴨等！

ふる雪の白さの中にて！

いと聖く雪はふる、

沈黙の中に散る花卉！

雪はしとやかに

踊りつつ地上に来る。

雪はふる！ 雪はふる！

白き翼の聖天使！

われ等が庭に身のまはりに

ささやき歌ひ雪はふる！

ふり来るは恵の麴麴なり！

ランス象徴詩に傾倒したのは、二十歳のころ、ベルギー滞在時代であった。

だいたい、大学詩の特徴は、香り高い官能と、鋭い機知と、流麗なリズムにあるが、初期のこれらの詩集には、まだそれらの要素が、はつきりした形をもつてきてはいない。若い感情の、なだらかな象徴的抒情が顕著だが、それでも、さすがに、そのかげに、すでに知的な想像力の動いているのを見のがすことはできない。

「雪」 この詩集巻頭の一編だが、雪の降りくるさまを、明るい比喩的イメージにとらえて、それを子供の足どりのように軽快なリズムで表現している。そこに高踏的な知性の活躍を感じさせる。

降る雪に、天の神殿の祭典を想い、雪片に聖い花卉や白衣の天使

小さく白き雪の足！

地上にも屋根の上にも
いと白く雪はふる。

冬の花弁の雪はふる！
地上の子等の祭なり！

秋のピエロ

泣笑ひしてわがピエロ
秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり。

Oの形の口をして
秋ぢや！ 秋ぢや！ と歌ふなり。

をしのび、また純白な恵みのマシナと見る。そして雪中に踊る蛸たち、こどものように純真な喜びを寄せている。

この詩の、小ささまで躍るようになりズムと、清純なイメージに、若き日の作者の清教徒的な面影をしのぶことができる。

「秋のピエロ」ここでは一身すぎ世すぎの是非もなく／おどけたれどもわがピエロ」と歌っているように、生業を強いられる青春の悲哀と感傷とを、泣き笑いする秋のピエロに寄せて抒情している。そのあてどない情緒の流れの中で、「Oの形の口をして」のフレーズが、一点視覚的なイメージを印象づけ、きわめて効果的である。本詩集の序の中で、永井荷風は、「われひそかに思う君はこれ月下仮装舞踏の曲にウエルレーヌが

月の様^{やう}なる白粉^{おしろい}の
顔が涙を流すなり。

身すぎ世すぎの是非もなく
おどけたれどもわがピエロ、

秋はしみじみ身に滲^しみて
真実なみだを流すなり。

夕ぐれの時はよい時

夕ぐれの時はよい時。

かぎりなくやさしいひと時。

『言葉なき歌』をしのぼんとする
詩人にあらずんば恐らくはかの壁^{かべ}
かぶりしフィーガロと共に泣きつ
つ笑わんとする諷刺の上にあらざ
るなきか」
と書いている。

このベীソスとリズムには、確
かにヴェルレーヌ的な感傷の質が
見られよう。

*わがピエロ 自分の内部のピエ
ロ的なもの、という意をこめる。

*身すぎ世すぎの是非もなく 生
活のためにやむをえず。

「夕ぐれの時はよい時」 大学時
有の諧謔^{かいぎョク}的自我意識が、情緒の主
題をはぐらかそうとはしない、い
わば真正面を向いた象徴的抒情詩
で、この点で大学らしくないと言
えば、言えないこともないが、そ
のきめのこまかい、優艶なリズム
は、こういう初期の作品において

それは季節にかかはらぬ、
冬なれば煖炉だんろのかたはら、
夏なれば大樹この木かけ、
それはいつも神秘に満ち、
それはいつも人の心を誘ふ、
それは人の心が、
ときに、しばしば、
静寂を愛することを、
知つてゐるものの様に、
小声にささやき、小声にかたる……

夕ぐれの時はよい時。
かぎりなくやさしいひと時。

若さにはふ人々の為めには、
それは愛撫あいぶに満ちたひと時、

も大学特有のものであるといえる。
夕暮の時に對するさまざまな思
考の合間合間に、

夕ぐれの時はよい時。
かぎりなくやさしいひと時。

というリフレインが、まるでため
息でもつくようなやさしい情感を
もって配置されて、全篇を整えて
いる。その構成上のこまかい配慮
も見のがすことはできない。

要するにこの詩の魅力である優
雅にバランスのとれた情緒は、そ
れが頭脳と魂との完全な融合と協
力によつて歌われているところ
にある。

夕暮の時間が限りなくやさしいひ
と時であるゆえんは、季節にか
わらず、いつも神秘と静寂に満ち
ているからであり、またどんな人
生にもかかわらず、たとえ若い
人たちには、やさしい愛撫の時

それはやさしさに溢れたひと時、

それは希望でいつばいなひと時、

また青春の夢とほく

失ひはてた人々の為めには、

それはやさしい思ひ出のひと時、

それは過ぎ去つた夢の酩酊、

それは今日の心には痛いけれど

しかも全く忘れかねた

その上の日のなつかしい移り香。

夕ぐれの時はよい時。

かぎりなくやさしいひと時。

夕ぐれのこの憂鬱は何所から来るのだらうか？

だれもそれを知らぬ！

（おお！ だれが何を知つてゐるものか？）

あり、希望でいつばいなひと時である一方、遠く青春の夢を失つた人々にとっては、なつかしい思ひ出のひと時であり、過ぎた夢に酔えるひと時でもある。思ひ出、それは今日の心には痛いけれども、まるで忘れようとしても忘れられない昔の夢の移り香のようになつかしいものだからである、という。そして、この夕ぐれに対する情感と思考は、さらに形而上的に深まってゆくのである。

夕暮は、このように感覚的にはやさしい時刻でもあるが、なんとなく訪れてくる、この心の重さと暗さとは、いったいどこからくるのかと、また立ち止って考える。だがそんなことは誰にもわからぬ、誰にわかるものか（もつともつと深い意味があるのだから——）と、自問自答する。

ごらん、夕暮はしだいに暗さの密度をまして、人間をいつそう強